長野県民生児童委員だより

つなぐ

Vol.114
2013
Autumn

平成25年10月1日
発行人　長野県民生児童委員協議会
会　長　百瀬　弘
編集人　編集委員会
委員長　熊井　文弘
〒380-0928 長野市若里7丁目1番7号
（長野県社会福祉協議会内）

特集　第22回長野県民生委員児童委員大会報告

Komagane

Contents

特集　第22回長野県民生委員児童委員大会報告
◆1日目　式典&メッセージライブ …… 2
「目が見えない」これが私の個性です
◆2日目　シンポジウム …… 3
「広げよう　地域の笑顔!元気!支え合い!」
◆表彰者紹介 …… 6
◆駒ヶ根スタッフ・参加者ピンナップ …… 7

長野県から　DV防止講演会のお知らせ …… 8

特集

第22回長野県民生委員児童委員大会報告

7月18日、19日と、駒ヶ根市で第22回長野県民生委員児童委員大会が開催されました。この大会は、3年に一度、一斉改選の年に行われます。今回は県内各地から970名余の民生児童委員が参加。中央アルプスの美しい山々を望む駒ヶ根市文化会館で、お揃いの赤いポロシャツを着用した駒ヶ根市民生児童委員の方々の温かいおもてなしを受けました。参加者の感想を含め、2日間の様子を紹介します。

第1日目

式典

149名4団体の盛大な表彰式

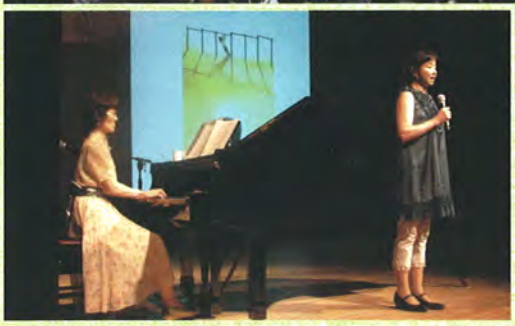
まず、百瀬 弘県民児協会長のあいさつでは、3年に一度の本大会に際し、2年前の東日本や栄村での震災、また松本地震についてあげ、災害時要援護者の把握や避難支援のための平常時からの態勢を呼びかけました。そして「多様な生活問題が浮上してきた。地域の福祉力の向上が重要」と、生活困窮者自立支援法や個人情報の取り扱いのガイドラインの問題にも触れました。最後に「誰もが住みやすい地域づくりを考えよう」と訴えました。

続いて、挨拶に立った杉本幸治駒ヶ根市長は、日ごろの民生児童委員の活動に対する感謝とソースカツ丼やごまプロジェクトなど、駒ヶ根市の取り組みを紹介しながら、歓迎のことばを述べました。

本年度の県民児協会長表彰の受賞者は後述のとおりです(受賞者氏名はP6参照)。当日、式典に出席された永年勤続民生児童委員115名、同協議会会長13名、優良単位民児協4団体に百瀬会長より表彰状が授与されました。来賓の加藤さゆり県副知事、本郷一彦県議会議長、腰原愛正県社会福祉協議会会長から祝辞をいただきました。

記念講演

～メッセージライブ～「目が見えない」これが私の個性です



記念講演は、声楽家・ソプラノ歌手の田中玲子さんとピアニストの本間礼子さんを迎えました。視覚障がい者である田中さんが「障がい者になって思うこと」「経験したこと」「みんなに理解して欲しいこと」等を澄んだ歌声とトークで訴えました。

田中さんは中学校の時、見え方の変化に気づき、高校は盲学校に進学。先天性網膜色素変性症と診断され、医者からはっきりと失明を宣告されました。「盲学校で友達に出会い、自分は夢を持っていいんだと思った」と友達との出会いや絆について語り始め、その後、健常者と同じように、さまざまなことに挑戦し、富士登山でご主人に出会ったこと。3人の子どもを出産、子育てをしていることを話しました。そして「自分の子どもには感じのいい大人になってほしい」と強調し、「ありがとう」「ごめんなさい」が言える大人に、との言葉が参加した委員の心に響きました。

田中さんからの3つのお願い。一つ目は放置自転車。「歩道に自転車を置かないで。自転車を倒してしまうし、倒れかけた自転車に赤ちゃんが乗っていて必死で抱き留めた経験から、他の人も傷つけてしまう可能性があり危険なんです」。二つ目は、「白杖の人を見かけた時、子どもに〝なんで杖持っているの?〟と聞かれたら、〝そんなこと聞かないの〟と言わずに、本当のことをしっかり説明してほしい」。三つ目は、知的障がいの息子と母親が一緒に男子トイレに入ったことで冷たい視線をあびた事例を挙げ、「世の中には事情があって、そうしなきゃならない人がいる。いろんな人がいるんだということを認めてほしい、いろんな個性を持った人がいることを知ってほしい」と訴えました。

最後に「その人でないとできないことがある。その人は必要とされているから生まれてくる」という両親の言葉を紹介し、「〝あの人は目が見えないからかわいそう〟と会った人が感じないような生き方をしたい」と結びました。

田中さんの澄んだ歌声といつも前向きに生きている生き方に感動したと、大好評(P7参照)で、大会にふさわしい講演となりました。

田中玲子氏プロフィール

埼玉県志木市在住。中学から見え方の変化に気づき高校は盲学校に進学。先天性網膜色素変性症と診断。点字受験で武蔵野音楽大学声楽科に合格し卒業。その後結婚出産し3児の母となる。現在は施設での点字表記の翻訳活動をしたり、各種コンサートや公演を通じて、障がい者理解を呼びかける。

第2日目

シンポジウム

―テーマ―「広げよう　地域の笑顔！元気！支え合い！」

～誰もが住みやすい地域づくりを目指して～

2日目のシンポジウムでは、ルーテル学院大学学長、市川一宏氏をコーディネーターに、駒ヶ根市中沢地区、上田市川西地区、松本市新村地区の民児協の実践発表を通して、住みやすい地域づくりに民生児童委員が果たす役割について考えました。

コーディネーターの▶市川一宏氏

課題を掘り起こし、それを原点に活動を

シンポジウムの冒頭で市川氏は、孤立・自殺・引きこもりなどの地域の生活課題を洗い直し「ここから私たちの活動は始まっていきます。どこにおいても課題はあり、そこをどのように理解するのか、あきらめるのか、だからこそ歩みを始めるのか、そこに大きな違いがある」と述べました。特に「孤立」について「身体的要因（買い物が大変だ）、心理的要因（おっくうになる）、環境的要因（交通の便が悪くなる、雪がふると怖い）があると誰でも閉じこもりがちになる」と指摘、「せっかくもっている能力を使わなくなるので、衰える。寝たきりになってしまう。人との関わりが減っていく…すると知的能力が衰える。人と会って会話をする。考えることが大事なのです」と話しました。「孤立死の問題」では、男性単身者が多いことをあげ、それぞれの生きがい活動を通して社会に貢献していただくこと、それぞれの居場所を作ることの大事さを訴えました。

そして「ちょっとしたことの手助けに困る人がいる。それを支えてもらいたい」また「介護している人の悩みを聞いてあげる人がいると、介護力は増す」と、地域で支え合うことが大切だと指摘しました。

小地域から始める活動を。資源を活かして、育てる、協働する

「長野の各地域には様々な資源があり、思いがあり捨てたものではない。自分たちの地域への愛着とか誇りを大事にしていく、文化を大事にしていく、これが〝オラたちの村だ〟いつでも夢を持って一緒にやっていこうという、気概があるところは継続できる可能性は十分ある」と、長野県社会福祉協議会発行の「信州流まめってぇ読本」や全国各地の事例を紹介しました。（信州流まめってぇ読本をぜひご覧ください）

自身の社会福祉に携わるきっかけとして、知的障害者施設でボランティアをした18歳の時に出会った言葉、糸賀一雄先生の〝この子らを世の光に〟をあげ、それぞれが「自分らしく居られる場」づくりが大切と話しました。また、「理解する」は英語で「understand」であり、上からではなく、住民としてunderに立っているから理解ができる。そこに民生児童委員の原点があると説明しました。

上越市「やすずか学園」の子どもたちの「ゆったりと大らかにやさしく」「急がばよりみち」で育つ場づくりを紹介。「大人の後ろ姿を見て子どもたちは育っていく。民生児童委員活動を見て子どもたちや地域は育っていく」と、出席した民生児童委員にエールを送りました。

後半には、民生委員・児童委員活動について、その活動のポイントを詳しく説明していきました。最後に「様々なやり方を通して、地域を築いていくこと。毎年チャレンジしていくこと。そしてその歩みを子どもたちに残していくこと。これが私の役割であり、民生児童委員の方々と歩んでいきたい」と結びました。

注文・問合せは
長野県社協　地域福祉推進グループ
☎026－226－1882

シンポジウム活動事例発表

地域のみんなで考える居場所づくり

駒ヶ根市
中沢地区民児協
古谷葉子氏

NPO法人「大曽倉ふれんど」として、宅幼老所「亀群（かめむら）」を運営。世帯数は40世帯、標高は1000メートル弱で、町まで出るのに車で30分弱。平成11年に高齢化率、423％という数字に驚いて、この素敵な地域でより素敵に生活していくためにはどうしたら良いかという課題探しのグループ活動を始め、平成16年に住民にアンケートをとり集約をして行政につなぐ。助け合える文化の根付く、安心して暮らし続けられる地域を目指す。一人になると食事・風呂等ロスがあるので、共同生活の場としての拠点づくり。介護や子育てをしているお母さん方に村の中で仕事場づくりができないかと農産物加工製造販売の施設の設置。休耕田を菜の花と花桃の里にしようと景観を大事にした地域づくり。それぞれの事業のために法人格を取得。その結果、県の支援金で民家を改修して平成19年4月に宅幼老所「亀群」を開設。今年で7年目。

拠点ができた事で皆さんが集まるようになり、民生児童委員としてもこの拠点が活かされてきた。小地域のネットワークということで社協ともスクラムを組んでやっていきたい。効果として、地域の方々が集まることにより地域のニーズが把握しやすくなった。ネットワークにより、ボランティアサークルなどの活動が高齢者へ提供されている。民生児童委員1人が問題を抱え込むのではなく、スタッフみんなで村のことを考えていきたい。

シンポジウム活動事例発表

子育て支援における学校と地域の連携について

上田市
川西地区民児協
斎藤 惇氏

上田市北西部に位置し人口約7、200人、2、700世帯、高齢化率28.2%の地域。定例会には地区の中学校1校、小学校2校の校長先生、保育園3園の園長が毎回出席。学校の行事や子どもたちの日常の情報交換・意見交換に努めている。

住民のニーズをうけ、21年4月に地域の小学校がコミュニティスクールの研究指定校になり、23年4月からコミュニティスクールとして3年間指定を受け活動。自然環境コミュニティ、歴史文化コミュニティ、スクールコミュニティという3つの委員会のもとに、公募組織の「お助け隊」を作って活動し、地域、保護者、学校3者が一体となり知恵を出し合い学校運営に参加。17のお助け隊があり、平成24年度は156名、平成25年度は196名が参加、また年間でお助け隊のボランティア等に参加した人、また学校を訪問した人は平成23年度で2、800名、24年度は3、100名。

民生児童委員はお助け隊としてボランティアをしているため、児童の学校内の様子がわかり顔なじみに。子どもたちのコミュニケーション能力の育成に役立っている。家庭への支援、地域における相談援助活動も。学校が地域の一員として地域の役に立つ存在となって高齢者の生きがい支え合いの絆が生まれている。暮らしやすい地域づくりとなる上、学校が大切な場所になり子どもたちに良い影響がある。（「つなぐ」112号参照）

活動事例発表に添えて

まず地域課題を共有してから支援を

市川 駒ヶ根市の古谷さん、アンケートはどのようにとったのですか。

古谷 「ふれんど通信」を発行しており、お母さんたち8名が全戸配布する際に、聞き取り調査をしました。

市川 アンケート調査でそれぞれの課題を共有するということが徹底出来たということが大きかったと思います。高齢化が進んでいるところから、どうして子育て支援をしようと思ったんですか。

古谷 村のおばあさんから「あそこのお母さんは大変そうだよ」というような意見を聞いた時に、少しでも預かれる場所があって、お母さんが安心して働けるようなことが必要かなと考えました。

市川 必要なところに手を差しのべているということに感銘を受けました。専門家の課題は、靴に合わせる活動をしてしまうため、靴ずれができてしまう。それぞれの地域にそれぞれの課題があり、その人たちに支援を合わせていく。そのお母さんたちもボランティアになり地域の担い手になっていくということで理解してよいでしょうか。

古谷 私たち8人のお母さんたちはささやかですが出資をして、運営して責任を取るという体制でやっております。

市川 最初に活動があって民生児童委員にとすすめられたということですが、引き受けたのは思いがあったのでしょう。

古谷 開所当時からいろいろな方からの相談を受けていました。地域の現状はどうなっているか気が付いたとしても入っていけない部分もあったので、今民生児童委員という役をもらったので村のお年寄りの方は安心してお話ししてくれる気がします。

市川 適材適所に民生児童委員がいて、この活動を通して様々な支え合いがあって、地域住民とともに支援をしているということが特徴だと思います。

子どもと親、そして地域が共に育つ

市川 上田市の斎藤さん、小学校の子どもたちの数は何人でしょうか。

斎藤 87名です。

市川 「コミュニティスクール」を推進したことは意欲的だなと思います。誰が最初仕掛け人になりましたか。

斎藤 地域が過疎化してきて学校の統合という話が。学校は地域の宝だ、という観点から地域全体で研究を始めて、「コミュニティスクール」であれば地域的にも良いし、認めてもらえるんじゃないかと、教育委員会にお願いしたわけです。

市川 地域発信のスクールですね。以前と活動しだしてからと違いますか。

斎藤 散歩していると「斎藤先生だ」と声をかけてくれますね。私も「気をつけておかえり」と声をかけるし、あいさつばかりじゃなくハイタッチもできる。

市川 地域で見守るということが、子どもたちの生きる力や成長する力を増やしていくと確信しています。PTAのメンバーにお助け隊等に加わっていただけるということもあるのですか。

斎藤 組織の中の保護者委員というのがPTAなんです。地域委員というのがお助け隊で学校の先生も加わり、三者でやっているということです。

市川 つまり活動しているとつながっていくということですね。いろいろな可能性を持って一つ一つ輪を広げていく。子どもたちを支えていく地域づくりがなされていく

シンポジウム活動事例発表

高齢者送迎 地域で支える
プチ送迎ボランティア活動の紹介

松本市
新村地区民児協
小林善則氏

新村地区の人口は3、350人、世帯数1、250戸、高齢化率30%前後、65歳以上の単身世帯は70戸、70歳以上の高齢夫婦世帯が65戸。典型的な農村地区で医療機関や商店がほとんどなく地区内にスーパーは1件もない。農作業、通勤、買い物、通院等生活の全てが車に依存している場所。

送迎車で交通弱者の外出支援を行うボランティア組織として、6年ほどの準備期間を経て、24年10月に活動開始。事業主体は、任意団体「プチ送迎ボランティア」。会員制組織で利用者、運転者、賛助者で構成。会費は1人2、000円。

公民館を拠点とし、毎週火曜日に予約の受付。送迎依頼された運転者は依頼者の所へ迎えに行き、目的地（病院・店舗・最寄りの停留所など）まで送り、また自宅まで送り届ける。定期運行は予約制でドアtoドアが基本。会員数は、6月現在で利用契約者14人、運転ボランティア15人、運営協力者が31人で計60人。

退職者が、社会に貢献できる組織として期待。あせらずに、「地域の課題解決は真摯な情熱と信念そして仲間づくり」をテーマに熱意を持って継続していくことを目的にがんばっている。（「つなぐ」113号参照）

ことが大事だと思います。子どもの支援の議論をするときに、「明日のある子どもたち、明日のある親たち、明日のある私たち」この3つは切り離せない。親たちも一緒に子育てに悩むことで親の成長もある。子どもたちが成長することによって地域もまた生き返っていくというような3つの連携があると認識しています。

高齢者の足として、男性退職者の力を

市川　松本市の小林さん、当初どういうアンケートをとったのですか。

小林　松本大学が近くにあるのですが、そこの学生と最初に始めたのが市が運営するコミュニティバスをどのように利用したいかなどのアンケートでした。町会を通じて全戸に配布し回収しました。

市川　やはり地域課題がかなりあったということですか。

小林　福祉ひろばや自主防災の活動の際に顔を出しているものですから、そういう中で見えてきた問題をバックアップしようというようなことです。

市川　プチ送迎ボランティアについて、65～75歳の高齢者・会員に社会貢献の機会(元気の源)を提供するということですが、この方々は会社員の方が多かったですか。

小林　定年になって家にいるという方が結構います。そういう人をターゲットにできるだけ仲間になってもらって、運転をしてもらえば地区貢献に重なっていくのではないかという考えです。

市川　男性ってこういう活動には入りにくくないですか。

小林　催し物があっても80%くらいは女性の方で、男性の参加者が非常に少なくて常に働きかけはしていますが、なかなか増えてくれません。

市川　いろいろな活動でも皆さんが課題としていること、男性の孤立の方が多いということも一緒なんですが、出てきていただけるようなきっかけづくりが大事です。今回はその人が持っている技術を提供していただいている。活動を通しながら男性が来たいという気持ちになってもらえるかどうかが勝負になるかなと思います。民生児童委員活動と生活の足に困っている人の支援は重なりますか。

小林　運転手が一人暮らしの人の所に訪問することによって孤独死が防げればと思います。

市川　民生児童委員活動の幅を広げるというやり方もある。方法は多様、しかし目指すものは同じ。これが様々な民生児童委員活動を支えていると思っています。

◆民生児童委員の再確認

①地域に散らばるアンテナ…地域にアンテナが広がっているほど強い地域です。どうコミュニティを再生していき、継続する絆を作るか。情報の発信アンテナそして、受信アンテナが地域に必要ですし民生児童委員の役割が不可欠です。

②協働者らとの連携…保健医療福祉関係者、ボランティア団体、住民と協働していくのだということを忘れないように。民生児童委員同士でも協働し、一緒に志があり、目標を同じくする人と連携していく。

③救急車型活動…救急車は一度乗せたら必ず必要なところへ届ける。必要なところはきちっとつなげていただく、ネットワークを確認しておくことが大事です。

④繰り出し梯子(新たなサービスの開拓)…ボランティアの原則です。長野がすごいなと思うのはホームヘルプサービスの発祥地なのですね。昭和38年老人福祉法施行の前に長野で始まっています。

⑤利用者と住民の代弁者…当事者がなかなか言えない時に、こうだと伝えていただきたい。

⑥啓発者・普及者…住民の福祉理解を促進する福祉の土壌づくり。この駒ヶ根はいくつもの福祉施設を引き受けています。その前提には今まで地域を耕し、啓発していた、だからこそスムーズに持ってこられたと聞いています。

駒ヶ根市のおもてなし

会場ホールでは地域の方の協力で、駒ヶ根の名物、ゴマやカツ丼ソース、手作りのお菓子や小物、地ビールまで並びました。

▲市内飲食店の多くが「ソースカツ丼」を名物として販売

▲おそろいの赤いポロシャツで受付もスムーズに

▲ホールでの販売は2日間にわたって行われた

駒ヶ根の「駒」に点をつけて「ゴマ」と読ませるキャンペーン

◀駐車場係も民生児童委員の男性陣が担当「お疲れ様でした!」

◀手作りのお菓子は人気でした

◀手作り小物に女性の参加者は夢中!!

▲南信州ビールは飲みやすく評判です

▲ゴマがふんだんに使われたクッキーやケーキなど

▲オリジナルカツ丼ソースの販売も

祝 県民児協会長表彰受賞

本大会において、次の方々に栄えある県民児協会長表彰が贈られました。長年の功労に敬意を表するとともに、心よりお祝いを申し上げます。

永年勤続民生児童委員（136名）

今期で、12年以上委員を務められる方に贈られました。

〔佐久穂町〕須田 民惠
〔川上村〕井出 進子
〔軽井沢町〕清水 文代　土屋 信次
萩原 ひさ江
〔御代田町〕堀篭 幸子　柳澤 澄子
〔立科町〕平坂 光明
〔長和町〕古川 雄司
〔青木村〕増田 奈香子　沓掛 昭子
〔富士見町〕小林 律子
〔辰野町〕酒井 貞夫
〔宮田村〕辰野 恭子
〔阿智村〕田中 和代
〔平谷村〕上田 洋子　豊田 好文
〔根羽村〕石原 正三
〔売木村〕村松 勝
〔天龍村〕関 トクミ
〔喬木村〕市瀬 紀子
〔大鹿村〕田島 龍二
〔上松町〕藤原 孝秀　田上 弘司
〔南木曽町〕志水 五郎　小幡 紀子
〔木曽町〕村瀬 泰信
木嶋 秀夫　森下 敬吉
長谷川 和一　田中 ゆき江
脇田 警　古本 勇
〔王滝村〕畑中 実祐
〔大桑村〕山本 克之　窪田 妙子
〔山形村〕笹川 武清
〔小谷村〕下原 德明
〔坂城町〕塩野入 博幸　青木 幹雄
〔小布施町〕丸山 六四郎
〔高山村〕中村 てる子
〔木島平村〕小松 章　加藤 小夜子
〔信濃町〕木田 勝　小林 繁
〔長野市〕安藤 勝之　荒木 清人
中村 幸子　西片 靜雄
宇都宮英子　鈴木 知
相澤 元幸　松井 貴美子
関 晃次　戸谷 敏人
宮嵜 公子　篠原 晴子
北村 隆一　若林 理惠子
深澤 茂代　中澤 玲子
曲尾 正子　田中 のぶ代
中嶋 英見　宮原 香代子
倉島 智惠美　木下 辰男
〔松本市〕宮下 信一　柳澤 治一
松森 克己　伊藤 吏
牛山 暉夫　藤澤 京子
原田 京子　中野 京子
五味 富士
横山 百合子
〔上田市〕横尾 智靖　増田 宗彦
横沢 孝子　池田 多津美
神尾 みち子　關 和子
竹内 聖淨　堀田 芳子
上島 美起子
〔岡谷市〕有賀 明三　岩田 恒男
小口 喜子　髙野 昭子
上田 明子　武井 聖子
児玉 和子　吉原 君子
片倉 嘉子
〔飯田市〕佐藤 克郎　伊藤 あい子
大前 哲二　清水 正則
岡島 篤子　松澤 明子
伊澤 皆子　北原 知惠子
小林 恭子　永田 繁江
木次 幸子
〔須坂市〕市ノ羽 茂則　城倉 直彦
〔小諸市〕丸山 義貞
〔伊那市〕竹上 一郎　北澤 好志美
〔駒ヶ根市〕工藤 二六子
〔中野市〕髙橋 正雄　縣 智
〔大町市〕清水 明子　駒澤 安正
成澤 ふき子
〔飯山市〕岸田 勉　吉田 正紀
〔塩尻市〕小山 正登　赤津 邦夫
〔佐久市〕若林 雅一郎　土屋 珠江
箕輪 一夫　小林 康行
佐藤 秀昭　伊藤 利雄
〔千曲市〕東條 二郎　田中 幸雄
〔安曇野市〕浅川 恭克　勝野 周司
海川 正治　山田 守二
佐藤 小百合　笠原 健市

永年勤続民生児童委員協議会会長（13名）

今期で、9年以上民児協会長を務められる方に贈られました。

〔原村〕五味 勇吉
〔小谷村〕下原 德明
〔坂城町〕塩野入 博幸
〔長野市〕伊藤 篤志　西澤 定男
鈴木 知　矢澤 純子
〔松本市〕西村 正治　木下 辰男
大池 弘子　赤羽 時江
〔岡谷市〕有賀 明三
〔飯田市〕岡庭 忠臣

優良単位民生児童委員協議会（4団体）

活動が優れている単位民児協に贈られました。

東筑摩郡朝日村民生児童委員協議会
長野市戸隠地区民生児童委員協議会
上田市川西地区民生委員・児童委員協議会
駒ヶ根市中沢地区民生児童委員協議会

表彰者インタビュー

駒ヶ根市民生児童委員
北澤 好志美 さん

55歳から4期やりました。民生児童委員は自分一人ではできません。家族の理解と協力に感謝しています。いずれは私も年をとりお世話になります。いま、自分にできることをやるだけです。12年を振り返って、自分自身が磨かれる体験でした。

安曇野市民生児童委員
笠原 健市 さん

委員の活動を通し、自分の無力さや未熟さを痛感しています。行政と住民との温度差も感じます。民生児童委員としての役割が思うようにいかない場面もありますが、活動を通して日々勉強させていただいています。

副知事と

優良単位民児協表彰
駒ヶ根市中央地区民児協
会長 **三室 光治さん**

市社協と連携して、11地区を4ブロックに分けて地元の役員やサロンの参加者らと交流会を行い、ネットワークづくりに取り組んでいます。今回の受賞は委員一人一人の励みになります。

※誌面スペースの関係で取材させていただいた全員を掲載することができず、深くお詫び申し上げます。当日取材に協力いただいたみなさん、ご協力ありがとうございました。

参加者ピンナップ

参加した方たちに会場やロビーなどで記者がランダムにお会いし感想をうかがいました。

巣山さん、増田さん、高野さん（安曇野市）

「シンポジウムを通して、地域の中での民生児童委員の果たす役割を学びました。ニーズを細かく捉え、実行に移すのは大変力が必要だと実感しています」

亘さん、長谷川さん、春日さん、宮坂さん（千曲市）

「田中さんの講演会での一言一言が大変勉強になりました。民生児童委員になってこうした研修会に参加できることは、自分自身に帰ってくることだと思い感謝しています」

堀篭さん、内堀さん、柳沢さん（御代田町）

「１日目の田中さんの講演は、前向きでわかりやすく、ぜひ地元の子ども達にも聞かせたい話でした。町でも企画できたらいいなと思いました」

増田さん（青木村）

「身体的なものも私自身の個性だとおもって活動しています。民生児童委員として相談を受けて対応策を見出すとき、力のなさを痛感します。気軽に支えあえる社会になるといいですね」

柳澤さん（宮田村）

「１日目の田中さんの講演で、障がい者自身の発する言葉は重いですね。民生児童委員は活動範囲が広い。今、民生児童委員自身の考えが問われていると感じます」

※誌面スペースの関係で取材させていただいた全員を掲載することができず、深くお詫び申し上げます。
当日取材に協力いただいたみなさん、ご協力ありがとうございました。

スタッフピンナップ

真っ赤なポロシャツで揃えた駒ヶ根市民児協の皆さん、当日に苦労話や感想をお聞きしました。

会長　竹上一郎さん

「駒ヶ根市に好印象をもたれるように行動しよう! と自費でユニフォームを作って、おもてなしの心を大切に準備してきました。駒ヶ根市は全国的に“福祉の町”として知られています。人口３万人に４つの老人ホームがあります。民生児童委員にとっても本人の事情にあわせ幅広い選択肢があります。そうした側面も知ってほしいですね。また民生児童委員はやりがいのあるものだということを浸透するため、この大会で委員同士の親睦を深めてほしいです」

小林タキさん（右）（民生委員の歌指揮者）

「駒ヶ根市の民生児童委員全員が同じユニフォームでステージに上がり歌います。とてもいい経験です。みなさんをわかりやすくご案内するため、シルクミュージアムで手作業でマークを胸に入れました」

（左から）小松さん、堺澤さん、相馬さん、下島さん

「２日目の最後の民生委員の歌は全員で歌います。音楽の先生に指導していただき、声が出るようになりました。駒ヶ根市はソースカツ丼をはじめ、「駒゛」プロジェクトとしてごま製品を作っています。また中央アルプスの水のおいしい地域でもあります。ぜひ堪能してくださいね」

（左から）赤羽根さん、北沢さん、青木さん、北川さん、池上さん

「１日目の田中さんの講演で、前向きな姿に感動しました。“障がい者だからかわいそう”と言われない生き方、人のせいにしない生き方はすばらしいですね。自転車を歩道に止めているのは本当に危ないことがわかり、その視点で今度はまちを歩いてみようと思いました」

長野県から

DV（ドメスティック・バイオレンス）防止講演会のお知らせ

ＤＶ（配偶者からの暴力）は、一部の特別な家族の問題ではなく、どこの家庭でも起こり得る問題で、犯罪となる行為をも含む人権を著しく侵害する重大な問題です。
皆様に広くＤＶ問題への理解と認識を深めていただき、暴力を許さない社会づくりの一層の推進にご協力ください。
今回は、将来に向けたＤＶ防止の観点から、昨今問題とされている、恋愛・交際をしている人たちの間で起こる「デートＤＶ」をテーマに開催します。

日時　平成25年11月5日（火）　午後1時30分から午後4時15分まで
（開場：午後0時30分）

場所　長野県松本合同庁舎 講堂　**参加費**　無料

内容
Ⅰ ビデオ上映「デートＤＶって何？～対等な関係を築くために～」
（企画：法務省人権擁護局 制作：公益財団法人 人権教育啓発推進センター）
Ⅱ 講 演「デートＤＶと学校～人権としてのセクシュアリティ尊重度」
講師 高橋 裕子（たかはし ゆうこ）氏（多摩市「ＴＡＭＡ女性センター」市民運営委員長）
Ⅲ 活動紹介　国際ソロプチミスト松本、国際ソロプチミスト長野 - みすず

主　催　長野県
共　催　国際ソロプチミスト松本、国際ソロプチミスト長野 - みすず
申込先　県健康福祉部こども・家庭課（電話： 026-235-7099 FAX ：026-235-7390）
電子メール　kodomo-fukushi@pref.nagano.lg.jp

編集委員リレー日記

酷暑の夏も終わり、私たち民生児童委員の任期も残りわずかになりました。今期で退任される方、また意を新たに継続をされる方、思いは様々だと感じます。３年の間に私たちが行ってきた活動は地域に必ず大きな実績となって残っていると思っています。

先日行われました県大会は開催地であります駒ヶ根市民児協の統率のとれた対応に心から拍手を送らせていただきます。２日間の大会のために全員の委員が多くの日時を費やして準備をされてきた結果が実を結んだものと思います。私たち民生児童委員、一人ひとりは力がないかもしれません。それでもみんなで協力していくことが大きな力になるのではないでしょうか。そしてその力は地域毎にいろいろな形で活動を起こしています。

私も編集委員３年の間に各地域から報告されました様々な活動を知ることができました。一委員でいる時はなかった本誌を隅々まで読むことで多くのことを学ばせていただきました。これからも本誌を必ず読んでください。

（小林　善則）

編集委員／　熊井　文弘・守屋　輝代・小平　實・小林　善則